



西海市分科会

過疎地域自立活性化優良事例発表会

コーディネーター

関司直也 (法政大学現代福祉学部准教授)

事例発表団体

愛知県東栄町 特定非営利活動法人 **てほへ**

徳島県神山町 特定非営利活動法人 **グリーンバレー**

岐阜県恵那市 特定非営利活動法人 **奥矢作森林塾**

長崎県西海市 **雪浦ウィーク実行委員会**

熊本県水俣市 **寄る会みなまた**

事 例 発 表 団 体

総務大臣賞

愛知県

特定非営利活動法人 **てほへ** (東栄町)^{とうえいちょう}

1ターンの若者たちが受け継ぐ地域文化と新たな地域創造への挑戦
～今、ひとつになりて、行かん～

徳島県

特定非営利活動法人 **グリーンバレー** (神山町)^{かみやまちょう}

日本の田舎をステキに変える！
サテライトオフィスプロジェクト

全国過疎地域自立促進連盟会長賞

岐阜県

特定非営利活動法人 **奥矢作森林塾** (惠那市)^{おおくや はぎしんりんじゅく えなし}

「古民家リフォーム塾」移住定住者と地域住民との協働
～みんなでやろまいか！古民家再生～

長崎県

雪浦ウィーク実行委員会 (西海市)^{ゆきのうら}

きてみんね！ ～スローライフの雪浦～

熊本県

寄ろ会みなまた (氷俣市)^{よろかい}

いっちょ寄ろうかい！
～そこにあるものを活かしたまちづくり～

コーディネーター

法政大学現代福祉学部准教授

ずし なおや
関司 直也



愛媛県生まれ。東京大学農学部を卒業し、東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専

攻に学ぶ。2005年に同研究科博士課程を単位取得退学。博士(農学)。(財)日本農業研究所研究員、法政大学現代福祉学部専任講師を経て、2009年より現職。(財)地域活性化センター・地域リーダー養成塾主任講師、地域振興・人材育成に関するアドバイザー等を歴任。専門分野は、農山村政策論、地域資源管理論。

著書/『農山村再生に挑む』(共著：岩波書店)、『現代のむら—むら論と日本社会の展望』(共著：農山漁村文化協会)、『若者と地域をつくる』(共著：原書房)など

〈図司〉 皆さん、おはようございます。昨日に引き続きまして、分科会のコーディネートを務めさせていただきます法政大学の図司です。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは、昨日表彰を受けられました団体の皆様、おめでとうございます。改めてお祝いを申し上げたいと思います。

今回の分科会で優良事例表彰の皆様方にご報告いただくわけですが、昨日、シンポジウムでいろいろなお話が出ましたけれども、学び合うという話が宮口先生からありました。まさに、この分科会は、先発する取り組みから学び、それを皆様方の現場に持ち帰っていただきながら、その要素から何かを学び取っていただければと思います。

今日は5団体の方々にお話をいただきます。何分、時間が限られておりますので、コンパクトにお話をいただくようお願いをいたしました。おそらく、ご報告いただく皆様方は、たぶん、話し足りないというところがあると思いますし、お聞きいただいている皆様方からも聞き足りないぞということがあると思いますので、足りない部分はそれぞれの現場に、ぜひ、足を運んでいただいて、直接じっくり現場で交流していただきながら、さらにそれぞれの地域の活動が前進するようにご活用いただければと思います。そういう意味では、限られた時間ですけれども、ぜひ、この分科会でとっかかりを皆様方と一緒につくればいいなと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、それぞれの事例のご報告をいただこうと思います。よろしくお願いいたします。

最初に、愛知県東栄町の特定非営利活動法人てほへの副理事長、大脇さんからIターンの若者たちが受け継ぐ地域文化と新たな地域創造への挑戦、「今、



ひとつになりて、行かん」という内容でご報告いただくと思います。よろしくお願いいたします。

愛知県東栄町 | 特定非営利活動法人 てほへ

Iターンの若者たちが受け継ぐ地域文化と新たな地域創造への挑戦 ~今、ひとつになりて、行かん~

理事長 伊藤 静男 副理事長 大脇 聡

〈大脇〉 皆様おはようございます。今、ご紹介いただきましたNPO法人てほへの副理事長をしています大脇と申します。今日は短い時間ですけれども、なるべく皆さんに伝わるようにお話できればと思います。よろしくお願いいたします。

私は、今日はNPO法人てほへの副理事長という立場でお話するんですけれども、実は現在このNPOの母体である「志多ら」という、愛知県を拠点にして活動していますプロの和太鼓チームで私はプロデューサーをしています。3年前までは舞台上に立って演奏していて、そういう立場で今回このNPO法人を立ち上げました。

まず、紹介のDVDがありますので、少し見ていただきたいと思います。

— DVD上映 —

ありがとうございます。

今、見ていただいたのが、ざっくりしたNPO法人の活動です。今日のお話は、どうしてこういうNPOの活動を和太鼓集団が始めたのかについて少しお話できればと思います。

Iターンの若者たちが受け継ぐ地域文化と新たな地域創造への挑戦ということですが、私たち和太鼓集団は、今、「蒼の大地」という全国ツアーを行っています。そのサブタイトルにもなっています「今、ひとつになりて、行かん」は、いろんな思いを込めてこういうタイトルにいたしました。

愛知県の東栄町というのは、愛知県の一番東の端に位置します。現在、3,757名ぐらいの町民の方がおいでです。私たちが住みついた東蘭目集落というのは36世帯79名という人口で、ほとんどがお年寄りです。それから、さっきもVTRで出てきましたが、「花祭り」というお祭りが、今なお11か所の集落にそれぞれ受け継がれて、芸能の宝庫のような町です。

私たち、この東栄町に住みついたのは、今から25年

前になります。25年前に、私たちが今暮らして拠点にしている東栄町の東蘭目小学校という、映像に出ている、この小さな学校をたまたま縁あって紹介していただきました。街場のほうでプロとして結成してすぐ、ご縁があって学校を使ったらどうかということで移住をしました。最初から地域おこしをしようというような思いでこの地域に入ったわけではなくて、街場では私たちがプロの活動として一日中太鼓の音を鳴らすことはできませんが、山の中なら大丈夫じゃないかということで、ご縁があって移り住むことになりました。

移り住んですぐに、集落に700年以上続いているお祭りがあるということで、村の方から、毎日太鼓をたたいているなら、ぜひお祭りを手伝ってくれというふうに声をかけていただきまして、700年も続く伝統的なお祭りの中に、Iターンである我々がかかわらせていただくきっかけとなりました。芸能集団ですので、この花祭りをモチーフにした舞台の作品をつくりましたところ、演目に「志多ら舞」と当時の区長さんが名づけてくださいました。それを1995年の2年目の花祭りで初めて奉納しました。これが、今年の映像になります。そういう伝統の中にIターンの我々が入って、お祭りをやらせていただけるようになってきました。

そのように私たちが花祭りに深くかかわって活動していく中で、特に東栄町の花祭りというのは郷土に根づく芸能なので、イコール、生活、郷土で生きる、そこで暮らすということが、祭りをすることと本当に切っても切れない、イコールなんじゃないかということに気づきます。祭りは、自然と人が調和をとりながら生きていくためにすごく大切なものです。単に舞の所作などだけを伝えているのではなくて、そういう中で、生きる知恵とかいろんなものを子供たちに受け継いでいる、そういう大切なものであることを実感しています。祭りに対する思いが地域の誇りになって、東栄町の人たちはすごく誇りを持って生きていくというのを実感して、僕たちもそういう思いを受け継いでいきたいなということで活動してきました。

和太鼓集団「志多ら」が目指す音楽観は、ここにあるように「人を結び、命奏でて、伝統を舞う」で、このキャッチコピーのもと活動しています。土地に根差した音楽こそ心を動かす力がある、本物の音を生み出していききたい、そういうことで25年前からスタートして、奥三河というところに拠点を置きながら舞台作品をつくってきました。



そういう中で、家族ができたり結婚したりします。うちの代表は女性ですけれども地域の方のところにお嫁に行っています。メンバーの2人が地域の方と結婚しました。私はメンバー同士で結婚したんですけれども、子供が生まれて、子供が地域の中へ入っていく。そういう中で、自分たちの芸能活動の世界だけではなくて、地域のいろんな問題が見えてきたり、いろんなことに気づき始めました。過疎、高齢化が進んでいるということはよく言われているんですけれども、そういう中で、本当に祭りを受け継いでいけるのかな、来年やれるのかなというようなことを肌を感じるようになって、そういうところに私たち芸能集団が何か貢献できないか、そういう思いでいました。

結成して20年経ったときに、そういう思いを座内の若いメンバーで話し合いながら、どういう形で地域貢献ができるんだろうかということで考えたのが、このNPO法人です。

これは、うちの志多らの全国にいるファンの方からなるファンクラブをNPO法人化したものです。なぜかという、外の人にも、自分たち志多らがつくる音楽が元気な地域で生まれ、そういう音楽、また地域に人々が目を向けていただいたり、足を運んでもらったり、お祭りに来ていただく。定住というのは、その先にあるのではないかなと思っています。遠いようで一番の近道は、こつこつそういう活動をしていくことかなと思います。

先ほどの「のき山放送局」、これは情報発信事業です。それから、廃校を利用した「のき山学校プロジェクト」「蒼の森ふるさと暮らし塾」とか、便利屋をしたりしています。今はNPOのスタッフもいますので、NPOのスタッフはそういうところで収入を得ながら生きています。いろんな課題があると思うんですが、私たちとしては、本当に地域の子供たちに誇りを

持って大人になってもらって、またふるさとに帰って来てほしいと思いますし、そういう場所をつくれるように活動を続けます。志多らはもともと自分たちが職業、なりわいをするために奥三河に拠点を構えたんですけれども、昨日のお話ではないですが、第2、第3の起業をし、そこで仕事を、なりわいをつくるぐらいの覚悟を持って来る若者が増えるといいなと思っています。そういうサポートをこのNPO法人でもしていきたいと思っています。そういうところが主な私たちの活動です。

また後でお話する時間があると思いますので、そのときにお話させていただきます。

ありがとうございました。



〈図司〉 大脇さん、どうもありがとうございました。

私も東栄町のほうに現場にお伺いさせていただきましたけれども、昨日、事例表彰のときに表彰をお受けになったのは、前に座られている理事長の伊藤さんですね。伊藤さんは地元の方なんですね。副理事長の大脇さんは外から来た方ですね。まさにこのような顔ぶれが示しているように、地元の皆さんと志多らを通じて入ってきた大脇さんのような方が一緒に組んでいるというのは、この取り組みを象徴するところだと思います。

何より、伝統文化や伝統芸能の根っこにある誇りとか、地域に根差している形をどういうふうにもう伝えていくのかはなかなか難しく、ご苦労されているところは多いと思いますが、その文化をわかりやすく「見える化」させながら交流につなげていって、この先の地域のことを考えていこうと一歩一歩進んでいるありさまが、先ほどのビデオとかスライドの中で語られていたのではないかと思います。

大脇さん、どうもありがとうございました。前に写

していただいているスライドは、今日お配りしている分科会資料のほうに同じものが入っておりますので、見えにくいところはお手元の資料のほうでぜひご確認ください。

それでは、2番目の事例発表に移りたいと思います。

同じく総務大臣賞を受賞されました、特定非営利活動法人グリーンバレーの理事長の大南さんから「日本の田舎をステキに変える！ サテライトオフィスプロジェクト」ということでご報告いただきます。よろしくお祈りします。

徳島県神山町 | 特定非営利活動法人 グリーンバレー

日本の田舎をステキに変える！
サテライトオフィスプロジェクト

理事長 大南 信也

〈大南〉 皆さん、おはようございます。徳島県の神山町から参りました。

グリーンバレーが、今、何をやっているのかを一言で表すと、神山町で育った子供たちに、仕事がないから古里に帰って来られないと言わせないようにしようということです。そのひとつが、サテライトオフィスという働き方です。神山でもこんな働き方ができるということを見せることによって、今までは都会に出ていくのが普通だったんだけど、神山に帰って来られるような状況を作り、それによって、地域における世代間の循環を取り戻していこうということです。

でも、日本の田舎において、世代間の循環は非常に細かい状態になっており、これだけで地域を持続させるのは難しいと思います。そこで、移住者を迎え入れる必要がありますが、仕事の問題が頭をもたげてきます。自分たちの町には雇用がない、仕事がないから移住者を迎え入れられない。そこで発想を転換し、じゃあ、雇用がないのであれば、仕事を持った人に移住してきてもらえれば、この問題は解決するのではないかと考えました。これが、「ワーク・イン・レジデンス」という手法です。

今日は、この2つについて少しお話をしたいと思います。

神山町が、今、全国的に少し注目をされているのは、2つの異変が過疎の町に起こったからだだと思います。

ひとつは、2011年度の社会動態人口が、神山町の

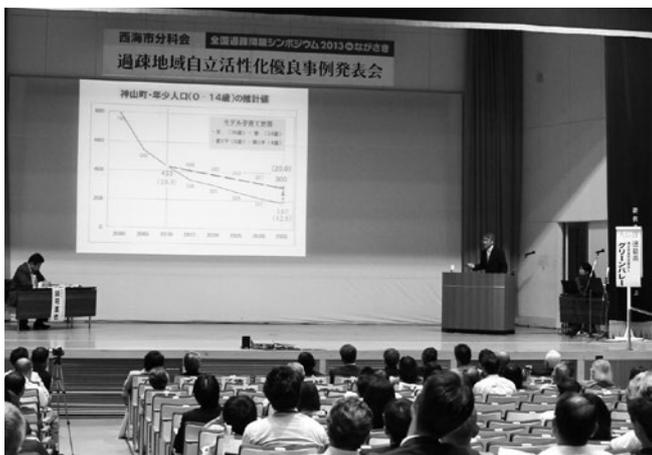
歴史が始まって以来初めて、転入者が転出者を上回ってプラス12人になったということです。もうひとつは、2010年の10月以降、ITベンチャー企業など10社がサテライトオフィスを設置したり、神山町に本社機能を移転する会社が出てきたりしています。こうした現象が過疎の町で起こるケースは稀だということなのでしょう。

何が引き金になったのでしょうか。1999年に始めた「神山アーティスト・イン・レジデンス」というアートプログラムです。毎年、外国人2名と日本人1名のアーティストを神山に招へいし、その人たちが作品を制作します。そのサポートを地域住民の手で行っていくプログラムです。

アートによるまちづくりは、今、全国でブームになっています。その際、2つの手法があるように思います。ひとつはほとんどの自治体が採用する方法で、観光客をターゲットにするモデルです。観光客を呼び込もうと思えば、有名なアーティストに作品をつくってもらふ必要があります。ところが、神山町のプログラムは、資金が潤沢にありません。そのため、有名な人を呼ぶことは困難です。さらに、地域住民の発案で始めたプログラムなので、組織の中に専門家がいまません。つまり、自分たちの力でアートを高めることは不可能です。でもアートは高められなくても、アーティストは高められるのではないかという発想に立ちます。

そこで、制作のために訪れるアーティストにターゲットを当てます。欧米のアーティストたちから、「日本に制作に行くんだったら神山だよ」と呼ばれるような場所をつくろうということになりました。そのために、神山の場の価値を高めることに注力していきます。

このプログラムを7年、8年間続けた後に、この



アーティストたちへの制作滞在支援をビジネスに転換できないかという方向を模索し始めます。ビジネス展開を目指すには、しっかりとした情報発信の仕組みが不可欠です。そこで、総務省から補助金をいただき、「イン神山」というウェブサイトをつくりました。当然、アートからビジネスを興していこうということで、アート関連記事の充実を図りました。しかし、いざ、このサイトが公開されると意外なことが起こります。一番よく読まれるのが、アート関連記事ではなく、「神山で暮らす」という神山の古民家情報だったわけです。そこから、ほとんどITターン者がいなかった神山に、移住需要の顕在化が起こってきました。

神山町の移住支援で特徴的なものに「ワーク・イン・レジデンス」があります。冒頭で申し上げたように、地域に仕事がないのであれば、仕事を持った人に移住してきてもらえれば、この問題が解決できるのではないかと考えました。そこで、空き家をツールに、町の将来にとって必要と思われるような働き手や起業家をピンポイントで逆指名し始めました。例えば、神山には石窯で焼くパン屋さんはありません。そういうパン屋さんができれば町の人も買えるし、第一楽しいですよ。そこで、この物件は、パン屋さんをオープンする人だけに貸し出しますという風に、入口を絞ってしまいます。また、インターネットの時代を迎えているのに、神山にはウェブのデザイナーがいらない。だから、この物件はウェブデザイナーさんだけに貸し出しますよという感じでマッチングを進めていきます。

普通の移住では、移住者が結果的にその人が何々をする人だったということがほとんどです。でも、事前に職種を特定できることによって、町をデザインできることになります。

例えば、神山町の上角商店街では1955年当時、38の商店が店を開いていました。ところが、この「ワーク・イン・レジデンス」を始める前の2008年には、わずか6軒まで商店が減っていました。この商店街の空き店舗を「ワーク・イン・レジデンス」で移住してきた起業家で埋めていきます。つまり、「ワーク・イン・レジデンス」を商店街に適用すれば、移住と起業と商店街再生を同時に解決できる可能性を持っているということです。そこで、2010年、グリーンバレーが商店街で空き店舗の改修を始めます。長屋の一角をオフィス兼住居に変える「オフィス・イン神山」という事業を始めました。この改修工事の過程で、サテライトオフィスが誕生しました。

改修に関わってくれていた建築家と、神山に初めてサテライトオフィスを置いたITベンチャーSan-sanの社長が大学の同期でした。社長は前職の三井物産の社員時代に、シリコンバレーでの滞在経験があり、その時に現地でのテレワークの実態をつぶさに観察していました。そして、2007年6月、働き方を革新するというミッションを掲げて、San-sanを起業します。友達の建築家から神山の話聞いた社長は、自分がシリコンバレー以来ずっと探していた場所に違いないと町にやって来て、即決で進出を決定し、神山におけるサテライトオフィスの端緒が開かれました。その後、サテライトオフィスや自然の中で伸び伸びと仕事をする社員の姿がNHKのニュースで報道されると、日本にもこんな場所があったんだと、東京のIT関係者に衝撃を与えました。

最初は開発チームの人員が派遣されてきましたが、最近では、オンライン営業まで神山で成立させています。もし仮に、営業が神山のような、あるいは長崎の離島とか半島のようなところできるといことになれば、確実に日本の地方や田舎が変わっていくと思います。

プラットイーズという会社は2012年4月に進出を決定。2013年1月からオフィスとなる古民家の改修工事を進めていき、7月1日、新しいオフィスをオープンさせました。新規雇用も生み出しています。町内から6名、県内から12名の若者がここで働いています。また元農機具小屋はサーバー棟として生まれ変わり、土蔵もオフィスとして改修されています。さらに、この会社は、アーカイブ棟を建設する予定です。ここでは、4K8Kと呼ばれている次世代のハイビジョン放送の実証実験の場となります。今後神山は4K8Kの場として、マスコミに登場するのではないかと思います。

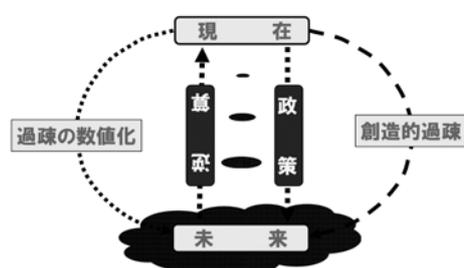
プラットイーズがサテライトオフィスを構えるこの付近には、3年前、約12の空き家や空き店舗がありました。そこにオフィスが生まれたり、クリエイターが移り住んだりしています。例えばビストロが11月に完成します。鎌倉からのサテライトオフィスもあります。映像作家や映画の予告屋さんが引っ越してきました。年度内にはグーグルで働いている若者夫婦がオフィスを開設します。演出家のオフィスもできる予定です。商店街にオフィスや人を集積することによって、人の流れを取り戻し、最終的に商店街の再生につなげていきたいと思っています。さらに、NHKの大河ドラマ「八重の桜」の、冒頭のタイトルバックを制作された菱川勢一ひしかわせいいちさんも神山にオフィ

スを置いていて、11月ごろから本格的に始動する予定となっています。

さて、まとめに入ります。グリーンバレーが今まで何をやってきたのかという話です。1999年にアートを導入しました。全くアートの素地のなかった場所です。あんなことやっても何もならんのにと地域の人たちは冷たい目で見っていました。ところが、何もならんと思うようなことでも、5年、10年、15年と続けることでひとつの価値を生みます。そして、地域の魅力が向上し、それにもなって必ず創造性を持った人が集まり始めます。この連鎖と循環、つまり人が人を呼ぶという現象を起こしています。

それとともに、旧住民と新住民の間で、知恵と経験の融合が確実に起こっています。こうしたことから地域づくりを見てみると、そこに何かがあるかというよりは、そこにどんな人が集まるかが重要になります。人が集まることによって、何かが生まれてくるのではないかと思います。

創造的過疎による地域再生



過疎化(人口減少)の現状を受け入れ、
人口構成を持続可能な形に変えていく

もう一方で、創造的過疎という考え方によって、まちづくりを進めています。例えば、現在から未来を眺めると、未来はぼんやりしています。特に、過疎の未来はより一層ぼんやりとしています。原因は過疎の問題を情緒的に捉えられる傾向があるからではないでしょうか。そこで必要となるのは、過疎の数値化だと思います。過疎を数値化することによって、未来をもう少しくっきりと浮かび上がらせ、そこから逆算して現在に降ろしてきて、いろんな政策を打ってあげれば、創造的な過疎、つまりコントロールの効いた過疎が実現できるはずで。創造的過疎の基本は、過疎を止めるという考え方は止め、受け入れましょうということです。人口という数だけに着目せずに、人口構成とか働く人たちの職種の多様化によって持続で

きる地域をつくろうというものです。

ひとつ例を挙げます。神山町の年少人口の将来推計について考えてみます。現在神山町には、433人の年少人口がいて、2035年には187人になります。しかし、年少人口という塊はひとつのイメージとして捉えることが難しいので、15で割って、1学年当たりの生徒数を算出します。そうすると、現在1学年28.9人いる子供たちが、2035年には12.5人になることが分かります。そこで、神山町の皆さん、これでいいですかと。もう少し頑張ってみましょう。例えば、2035年に1学年20人の神山をつくるという目標を掲げます。ここで、親子4人で構成されるモデルの子育て世帯を設定します。そして、モデル世帯の移住を毎年何世帯実現すれば目標が達成できるかを算出します。答えは5世帯20名。目標が明確になります。その結果、これに対してどうすればいいのかが、より明確になります。この人たちが住むための住居が5戸必要だとか、その人たちがやる仕事が必要になるとかです。こうして問題点をかみ砕くことによって、解決法を見え易くすることが可能になります。

さて、最後のスライドに移ります。「ぼくのわたしの好きな場所」です。皆さんにも好きな場所があると思います。でも、好きな場所を好きなまま置いておいても何も変化はありません。何をやればいいでしょうか。今日は、長崎県の方がたくさんおいでなので、好きな長崎を素敵な長崎に変えてみませんか。難しそうですが、案外簡単です。「すてき」の中にも「すき」が含まれています。では「すき」に何を加えたら「すてき」になるでしょう。「て(手)」です。手を加えるということは、皆さん方がアクションを起こすということです。

皆さんの好きなこの長崎が、もっともっと素敵な長崎になりますことをお祈りをいたしまして、私の事例発表を終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

〈図司〉 大南さん、ありがとうございました。

神山の事例はメディアに取り上げられる機会が多くなってきていますので、ご覧になった方もいらっしゃるかと思います。今の大南さんのお話を伺うと、ITというデジタルなところがとかく注目されがちですけれども、かなりそのベースにアナログというんでしょうか、人づき合いのかなりウェットなところが確実にあって、その上の到達点がITベンチャーの今のサテライトオフィスになっているのだというところに非常に感銘を受けます。あまり表層

的に見てしまうと誤解をしてしまうような、そういう神山のすごみをお話いただけただのではないかと思います。

どうもありがとうございます。

3番目の事例発表に移りたいと思います。ここからは、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受けられた団体の皆さんに発表をいただこうと思います。それではお願いします。

岐阜県恵那市 | 特定非営利活動法人 奥矢作森林塾

「古民家リフォーム塾」移住定住者と地域住民との協働 ～みんなでやろまいか！古民家再生～

理事長 大島 光利

〈大島〉 皆さん、おはようございます。岐阜から参りました、NPO法人 奥矢作森林塾の大島と申します。

それでは、早速発表に入りたいと思います。

私のところは、古民家リフォーム塾と言いまして、古民家を再生して皆様方に住んでいただくという取り組みをしております。とにかく「みんなでやろまいか！」と、これがキャッチフレーズでございます。「みんなでやろまいか！」というのは、皆様と一緒にやろうじゃないかという意味です。

私の住んでいるところは、岐阜県恵那市の一番南の端でございます。愛知県豊田市との県境にあります。そんな中、平成12年に、この矢作ダムというダムに、3万5,000立方メートルという大量の流木が流れ込んだわけなんです。この災害をもとにいたしまして、私どもの森林塾が始まったわけです。これが、昭和42年に廃校になりました申原小中学校なん



ですけれども、ここを拠点として現在仕事をしております。

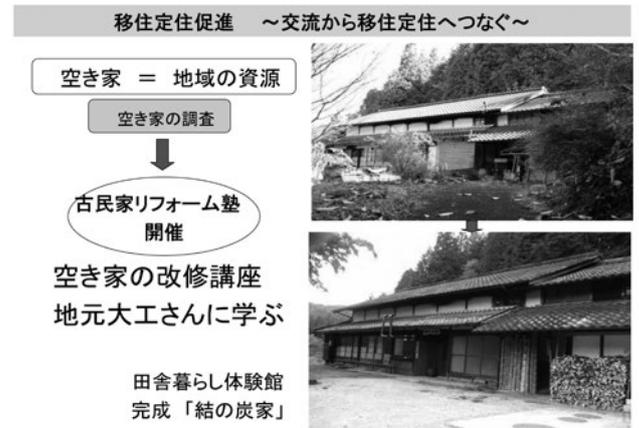
私どもの沿革でございますが、時間がございませんので、18年の9月にNPO法人を発足させて現在に至っているということで、皆様方のお手元の資料を読んでいただければと思います。

まずは山林を再生しないと大きな災害はおさまらないということで、山林再生のために、まずは、山で働く人をつくろうじゃないかということで、チェーンソー講習を毎年行っております。そして山に入りまして、まず、山林健康診断を行います。この山林をどういう山林にしようかということなんです。建築資材をつくる山林、それから100年後を見据える山林というのはつくり方が違いますので、その山林の役割によって、どういう山林をつくるのかという研修をここで行います。間伐材を利用いたしまして公園整備なども行っております。間伐材でテーブルやベンチをつくりまして各公園に設置をしています。

そんな中、この矢作ダムへ流れ込む流木を何とか資源化しようということになりまして、まず、日本一の窯をつくりました。一度に60立方メートル炭化できる、奥行きが10メートル、幅3メートル、高さ2メートルという大きな窯です。ここで流れ込む流木を全て資源化しております。雑木もかなり流れ込んできますので、それは、普通の昔からの燃料炭として利用する。そのための小さな200リットルの窯につきましては、研修窯として利用しています。これは、研修風景なんですけれども、小中学生の体験、こちらは、高校生、大学生の研究です。

大窯でできました流木炭を、どういう形で利用しているかと申しますと、水質浄化のために流木を布団かごというネットに入れまして河川に沈めております。これによって水質浄化を行っております。そして、小中学生とタイアップして、蛍、カワニナを養殖して、この水質浄化された河川に放流をして、蛍祭りなんかで楽しんでおります。

本題に入りますけれども、移住定住促進については、交流から移住につないでおります。最初に、基地局をつくろうじゃないかということで、これが改修前の家なんですけれども、リフォームによりましてこのような形にして、ここを基地として行っております。「田舎暮らし体験館 結の炭家」ということで、私どもは、この「結」という言葉を非常に大事にしております。昔から、田植なんかであっても、田植に行き、また労力で返していただくという「結」という言葉を非常に大事にしまして、このリフォーム塾



を行っております。

これがリフォーム塾の沿革でございますけれども、これも冊子の中に載っておりますので読んでいただければと思います。

こんな中で、まず地元の大工さん、そして左官屋さんなどに講師をお願いいたしまして、まず、道具のつくり方から研修を行います。全国から来ていただくんですけれども、だいたい、東につきましては千葉のあたりから来ていただいております。西は大阪あたりからで、1回につき平均で17～18名ぐらいがいらしています。ほとんどの方が、私ども申原に家を買って、このような形でリフォームを行いたいと希望されております。

これがリフォームの状態です、ほとんどの家は柱だけにしてしまいます。柱だけにして、レベルをとりまして組み上げていきます。まちの方は、田舎の家にはいろいろが欲しいとおっしゃるので、ほとんどの家にいろいろ、火窯をつくっております。壁なんかほとんど自分たちで塗ります。壁塗り、上塗り、下塗りということで、まず現在使われている新建材を全て取り外します。そして、この家ができた150年前、そして200年前の家に戻そうじゃないかということで、下塗りをし、上塗りをし、きちんとした昔の古民家に戻しています。

移住者の方は地元の方と交流を行われます。まちから見た方たちは、おいしい無農薬の野菜が食べたいということで、援農隊によりまして、リフォーム塾生の皆さんに野菜のつくり方や、米のつくり方なんかの支援をしております。

移住者の方々が来ていただいてリフォーム技術を学ぶというのは、ほとんどの方が自分で自分の家をつくりたいということでございますので、まずは地元の大工さんをお願いをして、リフォーム技術を

習っていただく。このリフォーム塾というのは、リフォーム塾生さんと地元の住民さんの交流の場になります。ここが一番大事なことでございまして、まず、地元を受け入れていただくということです。私どもの串原というところは、よそから来た者をよそ者として扱うところではございません。ほとんどの住民の皆様がウェルカムな地域なんです。ですから、まちから来ていただいて、自分で自分の家を直していただいて、そして、住民と一緒にみんなで地域をつくっていくというのが、このリフォーム塾の趣旨です。

そんな中で、交流事業にも多く取り組んでおります。月に一度程度、「里山体験イベント」を開催しております。そして、毎月第2日曜日につきましては、「里山ぼらんていあ」ということで、お弁当を持って他県から来ていただいて、1日ボランティアをしていた日です。婚活も行ってございまして、男女交流事業、それから、リフォームの開催は全10回行ってございます。そして、地域の皆さんに、私どもの事業を報告するための機関紙「山結人」を発行しております。

これは、里山ボランティアの「へぼ飯」づくりです。まあ、へぼといって皆さんご存じないとかと思いますが、学名クロスズメバチといって土の中に巣をつくる蜂で、私たちの地域では非常に多くの方が飼っています。

わらなどを利用した草履づくりというイベントもやっております。

それから第2日曜日の「里山ぼらんていあ」につきましては、皆さんに来ていただいて、U字溝の設置や、石垣の設置、草刈りの応援、春は桜の苗の植えつけなど、困っている方の応援をしていただいております。

「縁会」という名前をつけておりますけれども、これは婚活です。田舎に来ていただいて、「ごつつお」と言われる五平餅なんかをつくりながら、1日ゆっくりしていただくという事業を行っております。

これは、移住者の方に串原地域に来ていただいて、新築をしていただいたところです。この新築につきましても、私たちがこの山を切って建てる際の開発許可なんかも全部応援いたしまして、それで、新築をしていただいております。

今後の課題をここに3つ挙げております。

都市・農村交流活動のPRとか、地域と都市のかけ橋になる私たちの体制を強化していくとか、若者の自立支援は、田舎に来ていただいて、若者が自立できるように起業する支援をしていただくということです。簡単なお説明をいたしましたけれども、ぜひ、

岐阜県の恵那市へ来ていただきまして、私どもの活動を見ていただければたいへんありがたいなと思います。皆様のお越しをお待ちしております。

ありがとうございました。

【図司】 奥矢作森林塾理事長の大島さんからご報告いただきました。ありがとうございました。

キーワードはリフォームですかね。先ほどのてほへさんの話とつながるかもしれませんが、リフォームが、地域の技術のようなものをつなぐひとつのきっかけをつくったりしていますね。そうでなければたぶん全然違う展開になっていたのではないかと思います。後でまたお話を伺わせてください。

【大島】 リフォームにつきましては、後ほどお話をする機会がありましたらお話したいと思います。

【図司】 それでは、事例発表の4番目に移りたいと思います。

続きまして、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞されました、地元の西海市の雪浦ウィーク実行委員会の発案者である渡辺さんからご報告いただきます。「きてみんね！ ～スローライフの雪浦～」ということでご報告をいただきます。よろしく申し上げます。

長崎県西海市 | 雪浦ウィーク実行委員会

きてみんね！ ～スローライフの雪浦～

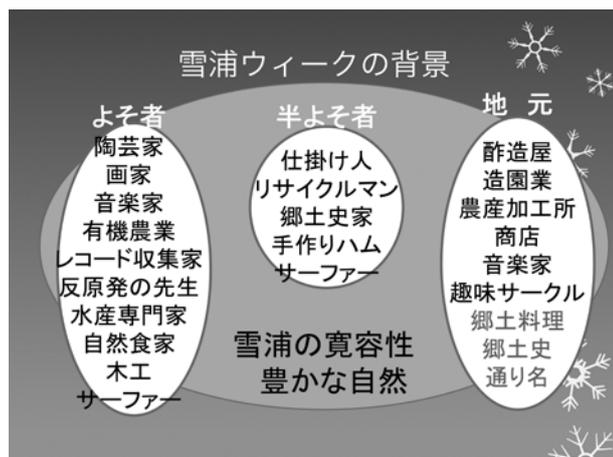
委員 渡辺 督郎

【渡辺】 皆さん、こんにちは。雪浦ウィーク発案発起人、言いだしっぺということで、雪浦ウィークを代表しましてプレゼンをすることになりました。よろしく申し上げます。

それでは、雪浦ウィークの概要についてお話しします。

1999年以来、今年で15回目を迎えました。開催日は、ゴールデンウィークの4日間です。雪浦地域は人口1,300人ぐらいですが、そこに1万人を超える人々が訪れるイベントに育ちました。地域回遊型のまち歩きイベントの先駆けと言われております。スローライフをテーマとして、雪浦地域全体を会場とするテーマパークに育ってきました。新たな出会いの広がりや年間を通したお付き合いも生まれています。

雪浦ウィークの背景ですが、ここに、半よそ者とあります。リサイクルマンだとか、郷土史家だとか、手づくりハムだとかをやっているUターン者です。よそ者、いわゆる移住者には、陶芸家だったり、画家だったり、音楽家だったり、これまたいろんな人たちがいます。これは、最初からいたわけではなくて、私が仕掛けたイベントを通して、人が人を呼ぶ的ところで集まってきました。地元にも、お酢屋さんがあったり、造園業屋さんがあったり、農産加工所があったり、商店があり、音楽家あり、趣味のサークルがあったりと、素材としては豊かな自然、郷土料理、郷土史等があって、この真ん中の半よそ者が、よそ者、移住者と地元の人たちのちょうど接着剂的な役割を果たしてきたと思います。取り巻く地域の雪浦地域の人たちの寛容性というのもひとつの大きな要素となっております。



雪浦ウィークのきっかけなんですけれども、先ほども話しました、半よそ者、よそ者、そして地元が一緒になって取り組めるイベントを探っていました。一堂に会するような産業祭的なイベントではなく、個性がいっぱいそろっておりますので、それぞれがそれぞれの場所で、それぞれのやり方で行うイベント、ただ、物を売るだけではない、ゆっくり交流のできるイベントを目指しました。そして、1週間丸ごと雪浦を開放する意味で「雪浦ウィーク」と名づけました。

これが最初のマップです。訪れる人たちはこのマップを片手に好きところを気の向くままに訪れてもらいます。このマップは、仲間である画家のタナカタケシ氏が毎年作成しています。1999年の最初のマップは一色刷りで、役場の印刷機をお借りしまして、こっそり印刷していました。出店の店舗も13軒で

した。2005年にはカラーになりまして、業者で印刷してもらうことになりました。これが、その裏側です。ここに、その年その年のテーマを書いていまして、これが今年のマップです。このマップを15枚並べると、それだけでタナカタケシの作品になっています。今年のテーマは「雪の浦 あったか語らい おもてなし」。東京オリンピックでも、おもてなしがキーワードになっていますが、ウィークのほうも、「おもてなし」と今年はつけました。

次に、雪浦ウィークの運営ですけれども、行政に頼らず、住民みずから自主運営で行っております。当初13店舗から、今では30店舗が参加しております。販売する人ばかりではありませんので、参加費を2,000円と売り上げの5%を運営資金としております。企画、準備、広報、看板立て等、全て会員全員で行っています。

この雪浦ウィークを支えてくれているのが雪浦ウィークの応援隊です。学生、地域住民、行政職員、そして多くのボランティアが参加してくれています。本部案内所での案内、街角での道先案内人、駐車場、横断歩道での交通整理等ですね。それから新聞、ラジオ、テレビ、雑誌等のメディアがよく取材をしてくれています。何もしなくても、広報費を使わなくても広報してもらえると状況になってきました。それから、地元音楽家と書いていますのは、地元内外の音楽家がライブ演奏に来てくれております。雪浦小学校は学習の一環として取り入れてくれるようになっています。歌や楽器の演奏、そしてスタンプラリーも子供たちが企画して参加するイベントになっています。また、学生って書いてますけれども、長崎大学のゼミも参加してくれております。

これは、ボランティアの皆さんにお礼として贈っている地域通貨券ですが、これも先ほどのタナカタケシさんのデザインです。

これまで15年続いているんですけれども、どうしてここまで続けてこられているかということ、終わってみんなで反省会をするんですが、そのときに出る言葉が、来年はこうしないといけない、ああしないといけないという、そういうコメントばかりで、「きつかけん終わろう」というコメントが出てなくて、それが、本当に続いてきている理由だと思えます。それと、これはマップの裏側にも書いていますけれども、雪浦ウィークは、皆、こういうこだわりを持ってやっています。

“雪浦をこよなく愛し、ここに暮らし、またここで活動する人々によって行われます。海山川にめぐまれた自然豊かな雪浦を多くの人々に紹介し、雪浦での

暮らし、生産、創作、趣味の場を開放することによって、訪れる側、迎える側、双方が共に楽しめる、顔の見える交流をする催しです。”

ということでやっております。

それでは、うちの地元のバンドですけれども、ライブ演奏をこれからお聞きいただきます。バンド名「ゆっくらし」という、事務局長の川添成行さん率いるバンドの演奏で、川添さんがつくった雪浦にちなんだオリジナル曲、「川辺をあるけば」「雪浦ロマンス」「秋祭り」「炭焼きの日々」「私のアイガモ君」をメドレーで聞きながら、スライドをご覧ください。雪浦の雰囲気を味わっていただければと思います。

— バンド演奏、スライド上映 —

ご清聴どうもありがとうございました。



【図司】 渡辺さん、演奏をしていただいた皆さん、ありがとうございました。

雪浦ウィーク、この後、現場のほうを歩かせていただきますけれども、実はこんな感じでやられているという様子をスライドでご覧いただくことができました。

雪浦のふだんの暮らしのところにお邪魔させていただくというんでしょうか、そういう1週間なんだなというのが、スライドから伝わってきたような気がします。1週間というのがたぶんみそなんですかね。非日常のようなイベントの部分もあるし、日常の部分も入るというんでしょうか、その絶妙なところのかなと、今の雰囲気を拝見させていただいて思いました。途中、雪浦ウィークの趣旨のお話がありましたが、おそらくそれはウィークの目標というだけではなく、もしかしたら雪浦の皆さんのそこに暮ら

す哲学というか、思いを示しているのかなと私はお見受けしました。この後、お伺いするのを楽しみにしております。

どうも皆さん、ありがとうございました。

それでは、最後の事例報告になります。続きましては、熊本県水俣市からお越しいただきました「寄ろ会みなまた」の代表の下田さん、副代表の桑畑さん、事務局の川端さんからご報告をいただきます。「いっちょ寄ろうかい！」ですね。そこにあるものを活かしたまちづくりということでお話をいただきます。では、お願いします。

熊本県水俣市 | 寄ろ会みなまた

いっちょ寄ろうかい！
～そこにあるものを活かしたまちづくり～

世話人代表 下田 国義 世話人副代表 桑畑 好継
事務局 川端 康平

【川端】 皆さん、こんにちは。寄ろ会みなまた事務局担当の川端と申します。本日は寄ろ会みなまたの取り組みについて、世話人代表の下田と副代表の桑畑とで説明させていただきますので、よろしく願いいたします。

本日は、寄ろ会みなまたはどんな組織で、どんなことをやっているのか、次に、寄ろ会みなまたの活動の特徴について、3つ目に平成17年度から取り組んでいる「菜の花のまちづくり」について説明をいたします。

環境創造みなまた推進事業の取り組みのひとつとして、平成3年3月に、水俣市内の地区全体集会を開催いたしました。この事業は、地域住民みずから足元を見つめ直す機会になり、地域住民の関心が高まりました。水俣病の発生以降、壊された地域のつながりをもう一度つくり直していくため、寄ろ会みなまたが平成3年7月に発足しました。なぜ「寄ろ会」と言いますと、寄り合い、話し合い、行動するため、「いっちょ寄ろうかい！」という掛け声が、そのまま組織名「寄ろ会みなまた」になりました。

水俣市には26の行政区があり、行政区をもとに、1区から22区、23区から26区をまとめてひとつの区として、全部で23区の「地区寄ろ会」があり、その集合体が「寄ろ会みなまた」となっています。事務局は教育委員会の生涯学習課にあります。

活動の特徴をご説明します。自分たちの地域づく

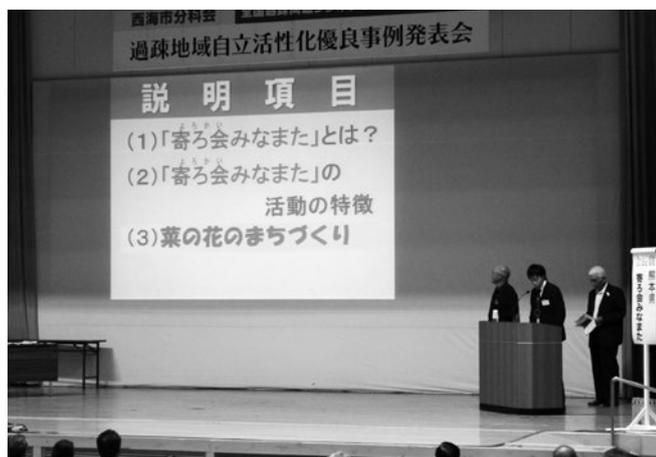
りは自分たちの手で行う住民参加型のまちづくりを行っています。ないものねだりから、あるものさがしへと転換し、地域の資源を活かしたまちづくりを考えて活動しています。また、水俣市が推進している環境に配慮した地域づくりに取り組んでいます。

それでは、どんな活動を行っているのか、簡単に説明します。地区寄り会では、各地区でさまざまな活動が行われていますが、一部を紹介いたします。左の写真は、4区の伝統文化継承の取り組みです。市の中心部、丸島町というところにある祇園神社で毎年7月に行われている「祇園さん祭り」のだんごづくりです。このだんごは9月の水俣病犠牲者の慰霊のお祭り、「火のまつり」でも振る舞われています。

次に、こちら右の写真ですが、16区の景観づくり・観光資源づくりで、山あいの茂川という地区にある鍋滝を活用した取り組みです。この鍋滝は、山の中にあって道もなく幻の滝と言われていました。そこで、寄り会を中心とした16区の方々が、地域の観光資源として、自分の手で滝まで行ける遊歩道を整備したことで、誰でも鍋滝へ行けるようになりました。毎年秋には鍋滝ウォークラリーと言って、鍋滝周辺を散策しながら空き缶拾い等の環境美化を行うイベントを行っています。

次に、こちら右下の写真ですが、19区の伝統文化の継承の取り組み、塩づくりです。ここは塩浜町という地名で、その名のとおり、昔、塩田が広がっていました。そのことに着目し、伝統の塩づくりを復活させました。水俣湾の海水をくみ、それを釜で煮詰めてつくっています。その塩は袋詰めをされ、水俣の夏祭り「恋龍祭」や「火のまつり」で振る舞われています。

そのほか、EM菌を利用した家庭排水の浄化の取り組み、クリスマスイルミネーションの整備等、それぞれ地区で特色ある活動を行っています。



次に、地区寄り会の集合体である、寄り会みなまたの活動について説明いたします。平成3年の発足時に、地区ごとに、自然、文化、歴史、伝統工芸等の有形・無形の資源を再発見し、それを集約した地域資源マップを作成しました。平成4年、水俣市は源流から河口まで完結する水俣川流域の町であるという特性を考え、自分たちがふだん口にする水はどこから来てどこに行くのだろうかというテーマをもとに、飲料水、農業用水、生活排水等、水の行方を地区ごとに調査し、水の経路図をつくりました。

それから、平成8年に、身近に存在する地域の学者や踊り、スポーツの名人の方々取材して、その知恵や経験、技術を地域の活性化に活かすため、地域人材マップ「みなまたの知恵袋」を作成しました。平成14年には「みなまたの知恵袋」に、水俣の名勝や文化史跡、郷土芸能など水俣遺産もあわせて掲載した地域人材マップ集「水俣のお宝大辞典」を作成いたしました。学校がこの本に載っている方々に講師を依頼するなど、総合的な学習の授業などで活用しています。

では、菜の花を利用した取り組みについて、どのようなことをしているのか、ここからは「寄り会みなまた」の世話人代表である下田さんに説明していただきます。

〈下田〉 皆さん、こんにちは。たいへんお忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございます。

それでは、私たちの寄り会がどういう仕事をしているのか、そこあたりを説明させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

菜の花による循環型農業の取り組みには6つほど目的があるかと思ひます。菜の花を植えるためには苗をつくる。苗をつくると、花を咲かせたいと思ひます。菜の花を咲かせますと新芽が出ます。その新芽を学校給食の中に取り入れてもらって子供に食べてもらいます。なぜ新芽を摘むかという、新芽を摘むことによって、俺が太うならないかんということで脇芽が出てくるからで、その脇芽を増やすために新芽を摘むんです。新芽を摘んだ後、菜種が大きくなりますので、種を取らないといけません。種を取ると今度はそれを搾らないといけません。搾った後、揚げ物などに用いて食べますが、それによって廃油が出てきます。その廃油をどうするか。その廃油でろうそくをつくっています。これは9月の第3土曜日、先ほどありました「火のまつり」に使わせてもらっています。では、使った後のかすをどうするか。畑に還元します。そして、学校の花壇やプランターなんかに使わせて

もらっています。だいたい、6つほどあります。そう
いうことが菜の花事業の循環型の取り組みになるか
と思います。

これは菜の花を植えている風景です。菜の花には
いろいろあるかと思っています。私たちが使っているの
は「ななしきぶ」という品種です。これは私が地域づ
くり団体で滋賀県の愛東町に行ったときに栽培され
ていた品種です。エルシン酸がないので学校給食に
使ってもいいということでしたから、これを給食に
使っております。

それでは、これは、子供が菜の花を植えていると
ころです。こうして準備をして子供と一緒につくっ
ています。

これは、土寄せです。土寄せをすることによって大
きくなります。学校の校庭に畑が2畝ほどあります
から、そこを利用して、学校の生徒と一緒につくっ
ています。一年中鑑賞できます。左のところが新芽を摘
んだところです。これは学校の生徒が摘んでくれて
いるところで、これを持って帰って、給食にしてい
まっています。

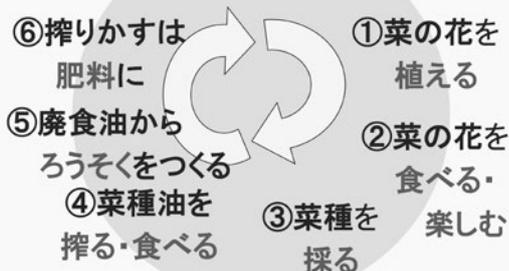
これが風景です。こうやって一年中咲きます。

今度は刈り取りをするところです。刈り取りでは、
作業手順を教えて、けがのないようにしています。菜
種を刈るときは、株から30センチメートルぐらいの
高さにしておきます。なぜそうするのかというと、風
が下を通りますから乾燥が早くなります。株の上に
びたっと置くと下から夜露が上がって乾燥がしく
く、雨が降ったりするとそれから芽が出てきますの
で、株の上に置くように子供に指導しているところ
です。

これは落としたところです。落として拾って、分別
をします。楽しみながら、わいわいがやがや言いなが
ら子供が足踏み機で脱穀しているところです。

菜の花・循環型の取り組み

◆耕作放棄地 → 菜の花畑に◆



これは、菜種を搾ったものを学校給食に贈呈して
いるところです。かすは学校の花壇とかに使って
もらっております。

年に3回ほど、学校で自分たちがつくった菜種か
らどうやって油を搾るか、その体験をしていると
ころです。

ご覧ください、子供のこの笑顔。目を輝かせ、こん
な小さいものからこんなに油が出るんですかと。田
舎のほうにある袋中学校に行ったときには、42名の
生徒のうち、菜種を知っている人が3名しかおりま
せませんでした。これだけ子供が菜種に携わってい
ないということです。ゴマやトウモロコシなど5つほ
どを持っていったんですが、その中から菜種が当て
られたのはたった3人でした。それだけ物にさわっ
てないんだなと私たちは考えました。どうやって今後、
そういうことを水俣の子供たちに教えていくか。菜
種からこういう油が出ますよということを知るため
には、学校の体験の中で子供に教えていくのがいい
かなと思いましたので、今はこれをやっております。

これが、ろうそくをつくっているところです。給食
センターで使った後の廃油を回収して、ろうそくを
つくって、これを「火のまつり」に使わせてもらっ
ております。この「火のまつり」に、自分がつくった
ろうそくに火がついたらどうかと、一生懸命になっ
て参加してくれます。今年は550名ほど参加して
いただきまして、いい祈りができたと思います。

あとのいろいろな苦労話などについては、副代表
の桑畑さんにお話をさせていただきたいと思いま
すので、よろしく願います。

【桑畑】 こんにちは。次に、苦労の話に移っていきます。

菜種をつくる前の段階で、私たちは畑を借りにい
きました。最初に借りた畑は約20アールです。新幹線
工事で出た廃土でかさ上げした田んぼであって、カ
ンネカズラと草と石ころの原野になっておりました。
これが1番目に苦労した畑です。

2番目は、水俣川の河川工事が出る廃土を田んぼ
に入れてかさ上げた約20アールです。こちらも放
置されておりますので、セイタカアワダチソウの私
よりも大きいのが林のようにいっぱい育っておっ
たんです。そういうのを刈り取って畑にするんです
けれども、こちらのほうは小さな石ころ、大きな石
ころ、いっぱい石が出てきて、まるで畑ではなく
川の土でした。

3番目は、年をとってもう作業ができんという人
から20アールぐらいの畑を借りました。3枚の田ん

ぼが段々畑になっておりまして、こちらのほうは、カンネカズラがいっぱいありまして、背の高い草もいっぱいありました。そこは横が森になっていて、森からマダケが入り込んできて、もう既に育っているんです。タケノコじゃないんです。竹になっているんです。その竹を切ったり、根っこを掘り出したりしながら畑にしましたけれども、今でもタケノコが生えてきて困っています。

苦労話の次は、少し悲しい話なんですけれども、私たちの作業はだいたい農作業に詳しい人を先頭にして作業をしています。最年長の85歳になられる世話人が亡くなりまして、そしたら私が2番目で80歳で、年長者になってしまいました。惜しい人を亡くしたなということで、今たいへん痛手に感じているところです。

4番目は、うれしい話をしたいと思います。私たちが小学校の5年生と一緒に菜種の花芽を摘むのがだいたい3月ごろですけれども、その摘んだ花芽を寄せておいて、給食センターの職員さんも一緒に作業してもらっています。給食センターでそれを調理してもらって食事をします。そして、学校の教室で、子供たちと一緒に給食を食べるんですけれども、そのときに、同じ教室の私のテーブルに座っている子供が、おじいちゃんのおいがすると言うんですよ。そのときは、とってもうれしい思いがします。一家団らのほのぼのとした幸せを味わっております。

これが、一応の流れの中ですけれども、最後に、これは私たちの会員有志たちの集合写真です。皆さんが仕事を持っているものですから、だいたい土曜日と日曜日、そのときに集まれる人たちが集まって作業しています。大勢の皆さんの大きなボランティア精神で、私たちの寄る会を支えてもらっております。

以上であります。どうもありがとうございました。

〈図司〉 3人の皆さん、どうもありがとうございました。

水俣は、地元学の動きを下地に地域づくりを積み重ねてきたということは結構有名なんですけれども、今回の寄る会の話は、それぞれの地区の共通の課題というんでしょうか、耕作放棄地に対してどういうふうアプローチをかけていくのかというところが垣間見えたかなと私なりに伺いました。あとは、少し広域でかかわることによって人も集まってくるし、子供たちもそうでしょうし、たぶん菜種の取れる量も増えるということで、おそらく地域での活動を



広げていく、つないでいく上でのひとつのアプローチの形を示していただけたのではないかと思います。

どうも、水俣の3人の皆さん、ありがとうございました。

以上、報告をいただきました。ここで、舞台転換をしたいと思いますので、しばらくお待ちいただければと思います。

— 舞台転換 —

〈図司〉 それでは、再開したいと思います。

5つの団体の皆さん、ご報告どうもありがとうございました。

意見交換の時間が、実はあまりとれません。ですので、舌足らずな進行になるかもしれませんが、限られた時間で少し掘り下げてみたいと思います。

昨日のシンポジウムの最後に「スイッチオン」で話が終わりましたので、アプローチとしても、まずは「スイッチ」の話でいきたいと思います。現場の皆さん、先ほどそういう部分のお話もいただいたと思うんですけれども、どこに、どういうタイミングでスイッチが入るのか、それぞれの取り組みの中でタイミングがあったと思うんですね。そのお話をいただくと思います。

今回、5つの団体にお話をいただきましたけれども、共通項が幾つかあったのかなと私なりに解釈をしております。入り口としての交流、そこから移住あるいは定住へという大きな流れが、どの団体にも垣間見えたと思います。しかし、「てほへ」さんの場合は、どちらかという、移住、定住が先で、今、交流に展開していて、順番が逆なところがユニークなところだと思いますし、「寄る会みなまた」さんの話でいけば、交流の部分のつなぎ方が、まずは地域の中での

交流あるいは世代間の交流というところで深みをもって取り組まれている、というところでも重なり合ってくるのかなと思いました。期せずして、分科会の5つの団体にそういうひとつの流れを描けるとすると、その中でスイッチについて、先ほどお話いただけなかったところに少し力点を置いてお話いただきたいと思います。

それでは、てほへの大脇さん、取り組みのいろいろないきさつのお話をいただきましたけれども、こういう地域づくりのNPOが立ち上がる、そのスイッチはどこら辺にどういうタイミングで入ったのか、改めてお話をいただけますか。

〈大脇〉 和太鼓集団として存在していて、最初からそれで稼げないと自分たちのプロの活動ができないということで、当時からいるメンバーは最初からスイッチオンの状態で奥三河に入ったんですね。

それで、こういうNPOを立ち上げて、本当に自分たちの活動を地域に返していこうと思いついたのは、メンバーに家族ができて、子供が生まれて、和太鼓打ちとしてではなくて、地域住民として地域に入っていくときぐらいですかね。そして、祭りや育っていく子供たちが大人になる。まちで仕事をしながら祭りのときだけ来る方も多いんですけども、ここに仕事がありさえすれば皆ここに住めるのにな、住みたいと思っていないかということを感じたころから我々のスイッチが入って、それを、友つながりやで知り合った地元のお父さん、お母さんなどの同世代の方たちにもスイッチオンしてもらえるように、一緒にいろいろやっけていこうとしています。



〈図司〉 そうすると、志多らの皆さんは、常によそから入ってくるという意味では、全開で入って行って、

むしろ子供さんができたり、家族ができて、地域の皆さんにむしろスイッチが入ってきた、外から入ってきたメンバーと一緒に何かやろうとか、やれるのではないかというスイッチが入ってきた、そんな順番になるんですかね。

〈大脇〉 そうですね。実際、私たち、今、太鼓のメンバーが18名います。全員Iターンです。ほとんどのメンバーが住民票を移しているんですけども、当時、うちの太鼓の代表のほうがいろんなお祭りのシンポジウムとかいろんなところに出たときに、よそ者がお祭りにかかわって祭りが変わってしまうのではないかということを言われたんです。女性で子供もいるのですけれども。私たちは、たぶん、一生、Iターン者だということを持ち続けていかなければいけないんですけども、我々の次の世代、子供たちは東栄町生まれで、純粋な地元民として祭りにかかわっているんです。そういう流れの中で、僕たちの太鼓の活動も含め、NPOの活動も含め、子供たちや街場にいる若い人たちを呼び込む、帰って来てもらえるいろんな活動ができるといいかと思っています。

〈図司〉 ありがとうございます。

続いて、グリーンバレー大南さんですね。先ほど、展開をわかりやすくお話をいただきました。たぶんいろんなところでスイッチの入るタイミングがあったのかと思いますが、改めてお話いただくとどんな感じになりますか。

〈大南〉 僕自身も経験があるんですけども、例えば神山の子供たちが高等学校に出るときには徳島市内に出ていくわけです。そして、下宿をする。私も昭和44年に下宿をしたその日に、下宿の隣のおばちゃんから、「あんた、どっから来たんえ？」と尋ねられて、「神山から来ました」と多少胸を張って答えると、返ってきた言葉が「山やな」と。「山」としか言ってもらえないわけです。結局、自分と同じ体験をこれからずっと後の世代も繰り返すんだらうなど。自分たちが住んでいる神山というのはひとつの世界と考えているけれども、よそから見れば徳島市内の南西に連なっている山のひとつにしか見えていない。だから、そうした場所をもう少し、例えばオープンで先端、先進、あるいは洗練された場所にしたいなという共通認識が、商工会の青年部で活動していた連中にもあったわけです。

そうしたときに、結局、1997年が大きな節目にな

りました。県から国際文化村を神山町につくるという話が出て、それが新聞発表されたときに、これから10年後、20年後を考えれば、県がつくるような施設であっても、住民自身が管理運営するような時代が来るだろう。そのときに単に与えられたものだったらうまく運営できるはずがない。だから、住民が望む国際文化村というのはこういうものですと逆に県に提案していこう、という動きを始めたわけです。今まではいろんなイベントをやれば、その向こう側に何かが見えてくるという発想で動いていたんだけど、その時点になって初めて、視点を未来に置き、将来こういう時代が来るだろうから、そこから逆算をして今何をやっておかないといけないのかを考えようということで、視点が180度変わりました。その時点が、たぶん、グリーンバレーにスイッチが入った瞬間ではないかと思います。

〈図司〉 とすると、ある意味、県からの提案というか、そのチャンスを、ただ漠然と受けとめるのではなくて、さらにもう一步踏み込むということができたわけですか。

〈大南〉 はい。

〈図司〉 先ほどの神山と言っても「山」としか呼んでもらえないという共通認識については、何となく皆さんがそういう話を地元でされていたんですかね。

〈大南〉 そうです。そのような中で、もう少しわくわくするような場所をつくりたいよねという、漠然とした思いがありました。いろんなことをやり始めるわけです。例えば、先進地の事例を引っ張ってきて、これを自分たちの町でやればうまくいくのではないかと考えてつまみ食いを行います。でも、3年、4年たってもあんまり変化がない。そこで、合わないものを引っ張ってきたんだと考え、もう一回勉強して、よそから別の先進地事例を引っ張ってきて、これをうちの町でやろうということで3年、4年やってみる。また続かない。こうした失敗を繰り返すうちに、やがて元気だった若者たちも歳をとってきて、俺たちの時代はだめだった、後の世代は頑張ってくれよと言って引退するというのが、日本の過疎地での地域づくりの動きではないかという気がします。

〈図司〉 でも、少なくとも、そういう試行錯誤がまずあって、チャンスをつかんだということですね。あり

がとうございます。勇気づけられる話だったかと思います。

続いて、奥矢作の大島さんですね。先ほど活動の原点は災害だったというお話がありましたが、いきなりそこでスイッチがぐっと入るものなのか、それとも何かしらもう少し地域のほうで動きがあったのか、その辺のお話を含めて、どうですか、スイッチの入り具合というのは。

〈大島〉 災害が最初のスイッチなんですけれども、本当のスイッチは、私どもが5年ほど前に空き家調査を行ったときです。空き家調査と意向調査を行ったわけなんですけれども、このときにだいたい地域の13%が空き家だったわけですね。何とかこれを地域の資源にしていこうということで、リフォーム塾を始めたわけです。このリフォーム塾のシステムは、私たちの恵那市に住んでみたいという方たちに、まずハード面だけリフォームする、改修するハードのお金だけ出していただいて、あとのソフト面については私どもボランティアと塾生によって家を改修して住んでいただくというシステムなんです。このシステムを使いますと、移住してこられる方は非常に安い金額で家が完成して、恵那の串原に住んでいただくことができます。

それと、また、私どもの地域は、昔からよそ者という意識がほとんどない地域なんです。それで、皆さんに来ていただいても、すぐ地域の皆さんと一緒にやっていただけるということで、「みんなでやるまいか！」というのがキャッチフレーズなんです。

それで、一番最初の「結の炭家」という、先ほどスライドに出ておりましたものをつくったわけなんです。このとき、150年経っていて、なおかつ30年ほど放置してあった古民家を直すということになりました。畳の上に乗ったらすとんと足が落ちてしまうような状態だったわけです。地域の皆さんに、「おまえたち、あんな家は諦めろよ。絶対に途中でやめるのではないか」ということを言われました。でも、やめろと言われるとやりたいのが我々で、そこでスイッチオンなんです。

そんな形で、現在まで1年に2軒から3軒をリフォームいたしまして、毎年新しい人に入ってきていただいて、地域の住民と一緒に地域をつくっていくという形でやっております。

〈図司〉 今、お話を伺っていると、リフォーム塾でかわる家というのは、もちろん移住される個人の方

のお宅ではあるとは思いますが、かかわっていることによって、みんなの家という意識が生まれてきて、それが地域の次の展開につながっているような印象を受けたんですが、そんな感じだったりするんですかね。

〈大島〉 そうですね。来ていただいた方は、もう皆さん串原の人、恵那市の人ですので、即、地域の自治会に入っていて一緒に活動しております。年寄りの皆さん方の応援なんかにも行っていただいておりまして、地域のアイドル的なおじいちゃんもいらっしゃいます。入ってきていただいた方に地域を支えてもらえるということで、たいへんありがたく思っています。

〈図司〉 ありがとうございます。移住定住の政策を打つときにいろいろと苦心されていると思いますが、アプローチのところで工夫をするというひとつの例ではないかと思えます。

続いて、雪浦ウィークの渡辺さんですね。先ほど、立ち上げについてもちょっとお話いただきましたけれども、一見すると同じようなイベントに見えるところが、先ほどのようにチラシがバージョンアップしていったり、違うキャッチフレーズというんでしょうか、テーマを掲げていくということで、何かしら違いを出しながら続いてきている。そのスイッチの入り方のところと、それを続けていくという2つの点について、渡辺さんから少しお話いただけますか。

〈渡辺〉 まず、私は地元雪浦で生まれはしたんですけれども、育ったのは長崎市内なんです。私、青年海外協力隊のOBとして、協力隊から帰って来て、自分の雪浦の祖母の家に来たことがあります。大瀬戸町なんですけれども、大瀬戸町をそのときに調べてみると、当時100人ぐらい高校生が卒業していて、その数だけ過疎化が進んでいました。それを見て、協力隊で途上国のためにとか偉そうに言いながら、自分のふるさとはどうなってるんだと、がーんと私、自分がまずスイッチオンになったんです。そして、30歳のときに雪浦で何かやろうと戻って来ました。

それから12年目にこのイベントを立ち上げるんですけれども、イベントを立ち上げる前の年に、長崎市出身の同じ協力隊のOBで、愛知県の瀬戸で陶芸の修業をしていたのがいたので、彼にも、おまえ、雪浦と一緒にやらないか、帰って来いと声をかけました。

そしたら、よし、帰って来る、雪浦で一緒にやろうと。そして彼が帰って来まして、窯開きのイベントと一緒にやるんです。何かやれば雪浦にも人が来てくれるというので、だんだん手応えが出てきて、先ほどの絵描きのタナカタケシさんも一緒に仲間に入ってもらって、イベントを仕掛けました。

そうしながら、地元の先ほどの川添さんだとかといろいろ話をしながら、何かやりたいよね、これだけ人が来ているのに何かやりたいよねということで、「やろう」と言ってスイッチがぽんと入ったということなんです。

〈図司〉 渡辺さんのような、地元出身で一回外を見て、また地元を振り返るような人たちの思いが一番ベースになって、それが少しずつ広がっていったという理解でよろしいですか。

〈渡辺〉 はい。

〈図司〉 先ほどのお話であった半よそ者というのは、今のような人を指しているんですか。

〈渡辺〉 そうです。よそから移住してくる人たちと、地元の川添さんたちとのちょうど真ん中ぐらいに緩衝材的に私のような人間がいるのかなという。

〈図司〉 ありがとうございます。今の渡辺さんのお話は、地元から外に輩出している人たちがたくさんいて、そういう人たちが渡辺さんのような存在に気づけば、何かしらのアクションを起こしてくれる、その可能性はゼロじゃないよという話になるんですかね。

〈渡辺〉 はい。

〈図司〉 ありがとうございます。

続いて、寄ろ会みなまたの下田さんですね。水俣も着々といろんな動きをとっていますけれども、今回の菜の花の話なども含めて、スイッチが入るタイミングというのはどんな感じだったんですか。

〈下田〉 菜の花については平成17年から取り組んできたんですが、このとき地域を見てみますと原野が多いわけです。放置された土地がたくさんあります。この放置された土地をこのままにしておいていいんだらうか、何とかしないといけないという気持ちで



あったんです。

私が滋賀県での地域づくり団体の大会に参加して、滋賀県の愛東町に行ったときに、ちょうど休耕田に菜の花を一生懸命植えつけられていたんです。それは、農協が主体となって老人会に委託して、老人会が菜の花をつくる。それを回収して油を搾る。その後、石油の高騰があって、農協あたりが、トラクターなんかに使っている油をつくりたいということで、そういう作業をされるのを見たんです。これかと思って、それを持ち帰って役員会に諮りました。ここでは、水俣の荒れている土地をどうにかしないといけないんじゃないかという話をしたんですが、そんなに簡単にいくかという反対がありました。しかし、何かしないと、今のままでは資源が放置されてしまうぞというふうなことから、やろうかということになりました。それから先ほどの苦労話の中にもありましたように、放置されたものを借りて、それを1反から2反、2反から3反、それから4反、5反と広げていきました。そこが、だいたいスイッチが入ったところじゃなかったかと思います。

それをすることによって子供とのつき合い、そして地域とのつき合いが生まれて、そうこうするうちに給食センターの人とのつき合いも始まりました。そういうふうにながさを呼ぶようになりまして、お互いに集まってそういうことができてきたと思います。

昔は、先ほどもありましたように、人が住んでいるところは、ほとんどが川沿いでした。川にはよどみというのがありまして、そのよどみの中で茶わんを洗ったり、鍋を洗ったりすることによって交流が生まれたと思います。そういうことが水の系脈図の中に出ておりましたものですから、今度は、ものをつくることによって交流ができんかということもあつた

と思います。

今、それがだいたい軌道に乗ってきたものですから、第2番目に、今、私は「食と農と暮らしを考える円卓会議」のメンバーとして仕事をしているのですが、先ほど言いましたように、たくさん休耕地や放置された畑があって、何とかしてそれを解消しようとしています。

水俣に何も特産がないわけですね。その特産を何とかしてつくろうということで、芋焼酎をつくってみようかということになりまして、今年、畑を20アールほど借りて、黄金千貫というサツマイモを2トン、米を480キログラムほどつくりました。それらを使って、私たちの水俣にはそういう酒造会社がないものですから、隣の鹿児島県の阿久根市の大石酒造さんに水俣の特産としての芋焼酎づくりをお願いしましたところ快諾いただきました。米も芋も水俣産で、水も水俣にしたかったんですけども、これは輸送がポリ容器では問題があるということで、大石酒造さんの井戸水を使わせてもらって製造しまして、今年は2,000本できました。その2,000本が2か月もかからずに売れました。

これでいいんだろうかということになりまして、今年は4,000本つくる予定です。実行委員会の中で2反、地域にお願いをして手を挙げた2地域で1反ずつ、サツマイモを計4反ほどでつくっております。これで今年は4,000本をつくって、来年は6,000本にする予定です。そうすることによって6反の耕作放棄地が解消され、サツマイモで水俣特産の芋焼酎ができるのではなかろうかと思います。それが今後の第2のスイッチです。

そういうことで、皆さん、「水俣あかり」という名前でございますので、水俣あかりが全国に広まったときには、ぜひお召し上がりください。水俣にはこんないい焼酎があるんだ、みんなで飲んでみようかと声をかけていただいて飲んでいただいて、一家団らんでわいわいがやがや楽しんでいただければいいかと思ひます。焼酎は毒にもなることもありますよ。(笑)でも、これを毒にせずに、喜ぶ方向に持っていただければと思いますので、ぜひよろしくお願ひします。

以上です。

〈図司〉 はい、ありがとうございます。

下田さんには今後の抱負も含めてお話をいただきました。時間が残りわずかになっていきますので、最後にほかの4人の皆さんにも、今回こういう受賞を受

けて、これからの活動に向けての抱負なり、もし課題があれば、こういうことに立ち向かって頑張りたいと思われていることを一言ずついただいて、この場を閉めたいと思います。

逆でいきましょうか。渡辺さんからお願いできますか。

〈渡辺〉 大臣賞は全然レベルが違うな、次は、うちも大臣賞を目指して頑張ろうと思いました。その事例を見せていただいて次のステップのヒントを今回いただいたので、何となくもやもやしていたのが、次はこうすればいいかというのが見えてきたように感じます。

〈図司〉 ありがとうございます。この後、また、現場のほうへお伺いいたしますので、ぜひよろしく願います。

大島さん、お願いします。



〈大島〉 私どもも地域のためにやっけていて、こういう賞をいただいたということで、大変な励みになるかと思えます。今、毎年毎年私どもの地域にお住まいになる、住みたいという方たちがどんどん増えておりますので、これからは、その事業を継続すると同時に、全国的に人口減少というのは避けられないということで、私どもの地域は、人口増というより、空き家ゼロを目標にやっけていこうかなということで、これからは空き家ゼロを目標にやりたいと思います。

〈図司〉 それでは、大南さんお願いします。

〈大南〉 過疎の問題を考えると、現在は全国の中でも、四国の山間部や秋田県なんかで過疎や高齢

化が一番進んでいますよね。でも、これは10年後、20年後の日本の都市周辺の姿でもあります。20年後、30年後の欧米の姿、40年後、50年後のアジア新興国の姿だということです。

つまり高齢化問題は、そういう世界的な課題になると思います。

だから、この過疎の問題をつらいよねって捉えるのか、あるいは、そこに未来が見えるという形で捉えるのかで全く対策が違ってくるのではないかと思います。もし、そこに未来が見えているのだったら、その一番現場に近いところで我々は活動しているわけで、そこで生まれるモデルは、今までは日本モデルでしたけれども、これからは世界モデルになる可能性があると思います。これから40年後、50年後、高齢化に対する、過疎に対するモデルみたいなもの、それを克服するノウハウが、もしかしたら将来の日本の主たる輸出品になる可能性があるような気が私はしています。

今日お集まりの皆さん方と一緒に、そういうことを夢見ながら、過疎をもう少しゆったりと明るく捉えて、そして未来を切り開く方向がつかれないかと思っています。

〈図司〉 ありがとうございます。

最後、大脇さん、お願いします。

〈大脇〉 私たちは文化を軸に活動しています。そういう意味では、今受け継がれている11か所の花祭りを10年後、20年後にもちゃんと残せるようないろんな活動をしていきたいなと思います。

花祭りのファンの方は全国にいて、そういう方にお手伝いいただいてイベントみたいな形にはできたととしても、そこに住む人がいないと本当の意味でのお祭りは守れないと思うんですね。地域との、暮らしとのつながりが、こういう郷土芸能とか神事芸能にはあるので、そういうところを大事にしながら、祭りを守るという活動が地域の元気につながればいいと思っています。

我々の太鼓のチームは「志多ら」という名前なんですけれども、志を持った者がいっぱい集まる、そういう場所にしたいねというところから、今、太鼓打ちじゃない志を持った者もどんどん集まっています。地元の中の志を持った人たちにも出会って新しい作用が生まれているかと思うので、そういう力を集結していけるような活動をどんどん進めていきたいと思っています。

我々の演奏は全国を回っていますので、ぜひご覧ください。奥三河ってどういうところだろうというのを音楽に乗せてイメージしていただいて、それで足を運んでいただくと非常にうれしいです。また、これから花祭りのシーズンが始まります。日本のど真ん中に奥三河はありますので、地図で見えていただいで遊びに来ていただくとうれしいです。よろしくお願いします。

〈図司〉 はい、ありがとうございます。

時間が過ぎました。これで閉じたいと思いますけれども、5つの団体の皆さんから志高く交流をするということの具体的な中身を語っていただけたのではないかと思います。それぞれの地域に、きっかけ、スイッチの入るタイミングがある。それは人から発するものです。人が何かしらのアクションを起こすことによって前進するものだという、共通したお話をいただけたのではないかと思います。

何より、このような事例の分科会は、ここが入り口で、後はそれぞれ現地に直接足を運んでいただいて、じかにその場所に身を置いて、取り組みの奥深さを知ることが一番大事だと思いますので、ぜひ、今回の分科会を機会に、そういう交流が深まることを私も楽しみにしまして、西海市の分科会をこれで閉じたいと思います。

駆け足になりましたけれども、5人の皆さんに、改めて拍手をください。どうもありがとうございます。

